

當津は本邦西海の邊陲にして、直に絶域に對望す、昔は支那西洋の通商互市するもの、皆此津に輻湊して自由を得たればとて、唐之湊とは云へり、後に肥の長崎安耜をもて、諸蕃來朝の榷場となりしかば、おのづから此湊の繁華の地をかへて、終に蕭然たる一漁村とはなりしなり、頼めども蟹の子さへもみえぬ哉いかゞはすべきからのみなどは、是唐山の客船も入來らず、此浦のさび渡りける比にやよみけらし、昔は市店軒を連ね樓屋臺を並べ、人煙富庶なりといふ礎砌など、今は茅のみ巷を塞ぎ、苔むしたる蹟のみぞ残りける、

〔海東諸國記〕薩摩州

戊子年遣使來朝、書稱薩摩州房泊、代官只吉以宗貞國請接待、

〔宗長手記〕大永三年、略中、薩摩の坊の津の商人、京にて興行に、

磯の上のちしほもあさのゆふべ哉

〔日本教育史資料十二 舊鹿兒島藩〕四書新註和訓達、洛陽之說、我如竹老師謂、甲斐信玄公之鴻儒、惺窩

先生者、天下之英才也、甲斐亡國、季安按、惺窩集、播州赤松廣通善遇惺窩、中略、甲斐信玄則其爲播州赤松廣通明矣、之後、牢落于洛陽、而愁四

書新註無和訓、自到于中華之地、欲傳新註之奧儀點和訓、故西欲下房、津即薩州防津也、赴中華、隔風泊船于

山川津、

○按ズルニ、惺窩文集載スル所ノ惺窩先生行狀ニハ、欲入大明國、直到筑陽、泛溟渤、逢風濤、漂著

鬼海島、トアリテ、房津ニ下ルノ事ナシ、

〔鹽尻八〕豐臣姓 秀次の謀叛顯はれし時、近衛殿は薩摩方防の津、菊亭殿は信濃國へ配流ありし、

其上御女一臺殿、大路を渡され玉ひしこそ、ためしなき御事也、建仁寺十如院にて永雄和尙、

道すがら車にあらで大臣をのするかごしまになふ棒の津と狂歌せしも、此時の事とぞ、

〔日本書紀九 神功〕九年○仲 九月己卯、令諸國集船舶練兵、甲、十月辛丑、從和珥津發之、